

洛東蹴上に樵者七兵衛なるもの、一日山に入て、歸ること遅かりしかば、其妻迎にゆきたるに、とある崖下に柴を一荷にし、息杖にもたせながら、人は見え、ふと見あぐれば、木の枝に大なる蚌首をたれて、腹ふくらかに見えしかば、こゝろき、たる女にて、是は夫を吞たるならんと、やがて彼荷に添たる鎌をとりてむかへば、蚌口をひらきて、是をも吞たり、吞れながらこの鎌にて、口より腹まで切裂しに、夫はたして腹中にありて、己とともに地へ落たれば、たゞちに肩にひきかけて我家に歸り、數十日保養を加へて、常に復しぬ。

〔續近世畸人傳^四〕浪華鶴女

鶴女は浪花戰場鐵や吉左衛門が妻なり、十四にして嫁し、良人によく仕へ、舅に孝あり、十六歳の春一男子を産しが、其年不幸にして、良人吉左衛門病死す、其忌もみちぬれば、親族集ひて、今男子ありといへども、まだ當歳なり、婿を撰みて鶴女に配んとて、しかぐ、かたらひければ、鶴女涙を流し、吾若しといへども、兩夫にまみえざるの教をきけり、はた良人の忘がたみに、男子さへあれば、我心の及ぶほどは、あるじに代りて舅に仕へ、此子をも養育せば、やと語に、人々感じあへり、かくて舅に仕ふること、良人生存の日よりも厚く、召つかふものにも情深ければ、皆其徳に伏しけり、さて年もかはり一周のいとなみも過しかば、先の人々、去るものは日々に疎しといふ諺をや思ひけん、又つとどひて、今はかく家事も整ひぬるものから、まだ齡のわかければ、行末覺束なし、唯まげて吾々が言にしたがひ給へといひけれど、鶴女なほさきのごとく誓ひていなみければ、せんすべなく止みぬ、かくしつ、天明のとし、此鶴女不起の病にかゝり、死に臨むころ、人々枕べによりて、おもふことあらば、殘なくのたまひ置ねといふに、さらに言置べきことなし、唯老人に先だつこと、今生のうらみなれど、是も命なればせんかたなし、此うへおもふことには、死して後棺に收るまでは、僧たりとも男子の手にふれしめたまふな、入棺の後は、世の作法もあれば、例にま